

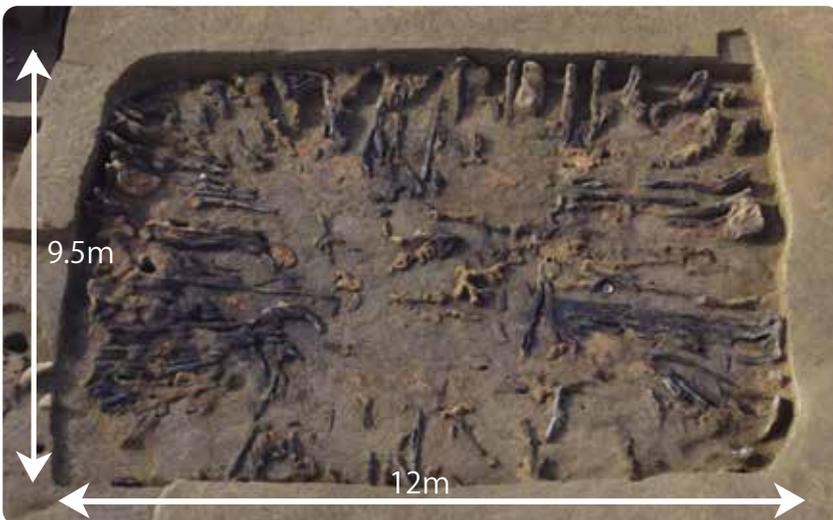
まきのじきた

幸手市 槇野地北遺跡 (第3次)

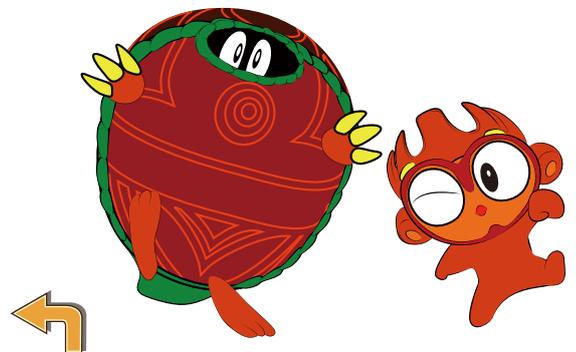
槇野地北遺跡は、江戸川の堤防強化事業に先立って昨年7月から発掘調査を行い、北側の調査区では既に縄文時代前期(約 6,000 年前)、古墳時代前期(約 1,700 年前)、奈良時代(約 1,300 年前)の住居跡などが多数発見されました。

現在調査を進めている南側の調査区では、一辺の長さが 10m を超える古墳時代前期の大型^{たてあな}竪穴住居跡が 3 軒見つかри、県内では初めての事例となりました。

また、古墳時代後期(約 1,500 年前)の住居跡では^{いろ}炉やカマドを持つ住居跡が多数発見されました。埼玉県内では 5 世紀中頃に炉からカマドへ切り替わりますが、この地域では 6 世紀以降にカマドを導入したことがわかりました。



古墳時代前期の大型竪穴住居跡

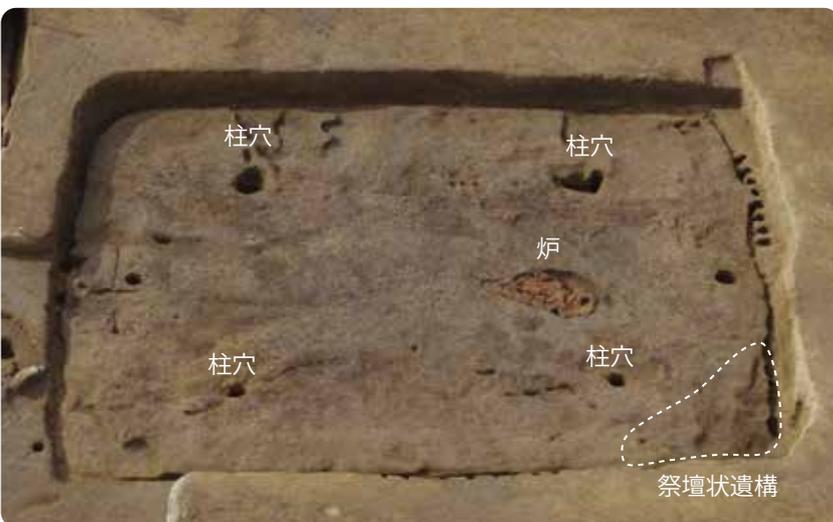


この住居跡は、使われなくなった後、意図的に家を燃やしていたことがわかりました。

炭化材^{たんかざい}は、出土状況から垂木^{たるき}と考えられます。遺物は家を燃やす前に持ち出していたようで、ほとんど出土しませんでした。

炭化材を取り除くと中央右側に炉跡が発見されました。炉跡からは、焼かれた小石が多数出土しました。住居の右下コーナーでは小型の土器破片と共に焼かれた小石が発見されており、ここに祭壇状の遺構があったと考えられます。

また、住居の床面からは等間隔に 4 本の柱の跡も発見されました。





カマドのない住居（炉）

古墳時代後期の始め頃の住居跡にはカマドがなく、炉が中央北寄りに作られていました。住居跡からは甕・^{かめ}甑が複数出土していることから、炉は粘土で作った簡易的な「カマド」のようなものが使われていたと考えられます。また、貯蔵穴は南側に作られ、その周りは堤状に高まっていました。



炉想像図



カマドのある住居



古墳時代後期でも6世紀中頃になると住居北側のカベにカマドが作られます。貯蔵穴もカマドの右側へと移り、住居全体が広く使われたことがわかります。



カマド想像図

